

■平成二十五年 秋彼岸会法話

仏の価値観

長泉寺住職 水庭 浩章

昨年、「価値」についてのお話をいたしました
が、憶えていらつしやいますでしょうか。

私が今、実際に身に付けているお袈裟、これ
は私にとってはものすごく価値のあるもので
す。私にとって、この布のつなぎ合わせたもの
は仏さまそのものであり、直接地面に置くこと
などできません。それほど尊いものです。

でも、皆様にとっては必要としないものです
よね。貰っても使い道がないと思います。

逆に、多くの方がお召しになっているワイシ
ヤツやネクタイ。なかにはそれがなければお仕

事にならないという方もいらつしやると思いま
す。しかし、私はそれが必要とはしません。

これはほんの一例ですが、人それぞれの仕事
や趣味によって、必要と感ずるものが違つてき
ます。人の価値観はそれぞれなのです。

私たちが人間は、それぞれの価値観を基準にし
て、好きとか嫌いとか、善いとか悪いとかを判
断しています。

しかし、人によって価値観は違うし、時代や
その時の精神状態によつても変わってきます。
それゆえに、人は迷い、悩み、時に他人を傷つ



けてしまうこともあるのです。

では、私たちは何を基準に、どこを拠り所にして生きていけばいいのか……。

その答えが、仏教にあります。それは、お釈迦様のお悟りです。どんなに時代が変わっても決してぶれない、絶対に変わらないものです。

『我と大地有情と同時に成道す』

お釈迦さまがお悟りをひらかれたときに云われたと伝えられているお言葉です。

「我」とは、お釈迦さまお一人を示すものではなく、命の源を示しています。すべてがここから生まれてきます。当然、お釈迦さまも命の源から生まれてきたわけです。私たちも同様です。「大地有情」とは、この世のありとあらゆる存在のことです。

「同時に」というのは、いつでもの意味で、「成

道」とは、道を成す。つまり、お悟りのことで
す。

「私たちを含む、この世のありとあらゆる存在のすべては、いつでもそこに尊い存在として道を成している。いつでもそこに、過不足なく備わっている。」ということですよ。

人は皆、平等に尊い存在である。絶対に平等である。決してあの人よりはこの人の方が上だと比べられるものではありません。

人に限らず、天地いっばいのいのちが、決して比べることなどできない絶対平等な存在なのです。

そのことを踏まえたうえで、謙虚に、自分のいのちを支えてくださるすべての存在に感謝して、自分を創りだしているすべてのものを全身心で感じて、あらゆるものを尊び、自分自身を尊ぶこと。

人に喜びを与えることを我が喜びとし、むや

みに怒りをあらわさず、他人を認め、自分自身を認めること。

姿形が変わるわけではありません。そこにある景色が変わるわけではありません。だけど、自分自身の心が、目に見える世界が、本当の意味での安らぎを得ることができる。

あなたはあなたでいい。あなたはあなたで唯一無二、尊い存在なのだから。

大筋だけですが、そのようなお話を昨年いたしました。

「価値」という事の専門的なことは、私は倫理学や経済学の勉強をしておりますので、深いお話はできません。しかし、仏の価値観については自信をもって云えます。

「価値」という字を、広辞苑で調べてみますと、『物事の役に立つ性質』経済学では『商品は使用価値と交換価値を持つとされる。』とあり

ます。

物事の役に立つ性質。例えば時計。この時計が動いているから時間がわかるわけです。今日も私に与えられている時間は四十分だと方丈から厳しく言われています。ですから、いま時計は私にとってはとても役に立つものです。

しかし、もし時計が止まっていたら、全く価値のないものになってしまいます。

次に、「使用価値」とは、肉体的に、或いは精神的に欲求を満たすもの、それぞれの趣味などは「使用価値」です。例えば「お酒を飲めば、嫌なことを忘れられる。」そのような人にとってみれば酒代はとも使用価値があるものです。「交換価値」とは、例えば「この水を一萬円で売りますよ」と言ったら、だれも買いませんよね。

この水の価値は、金額にすると百数十円である。そのことに納得した人が買い求めるとい

ことです。

しかし、もし深刻な水不足になり、全く水が手に入らない。水がなければ生きてゆけないという状況になれば、一萬円出しても買い求める人は多く出てくると思います。これが、「交換価値」の一例です。

このように、「価値」というのは、人やその時の状況によって変わってしまうものです。水の話にしても、私は、水の豊富な、美味しい清水が湧き出しているようなところで生まれ育ちましたから、いまだにお金を出してお水を買うということに抵抗があります。逆に、高いお金を払ってでも、安全でおいしい水を求めるとい人もいます。それが、それぞれの価値観ということです。

先日、インターネットで調べ物をしているときに、たまたま「あなたの値段を鑑定します」というページを見つけ驚きました。

内容を見てみますと、二十二の問題に対して順に回答をしていき、その結果をもとに値段を決め、順位を付けるというものです。

因みに、一位の人が二億三五八九万四四七九円で、ワースト一位の人は、ふざけて回答したのかもしれないが〇円でした。

果たして、二十二の質問でどの程度人のことが分かるのか。興味本位で私も答えてみたのですが、その質問内容に気分が悪くなってやめました。

そもそも人に値段なんか付けることができるのでしょうか。人が人の価値を測れるものなのでしょうか。

それぞれに価値観はありますから、その価値観の合う合わないで様々な選択をしていくことはよくあります。

会社の面接や、配偶者を選ぶときにはとても大切なことです。

しかし、それはあくまで会社に合う合わない、自分に合う合わないを決めるだけのことであって、その人の価値を決められるものではありません。

何をもって価値があるというのか……。給料が高ければ価値があるのか……。みんながうらやむような仕事に就くことが価値があるのか……。

それは違いますよね。

私の知り合いの、あるお方のお話をいたします。

そのお方は、ここではTさんとおよびいたします。Tさんとは、趣味の野球を通じて知り合いです。年は私よりも一回り上ですが、たいへん親しくお付き合いさせて頂いております。

Tさんのお仕事は、ゴミ収集業です。家庭から出たゴミ、或いは、飲食店などの業者から出たゴミを集め、焼却所まで運んでいきます。



ゴミ収集に関しては自治体によって違いはありますが、Tさんの地域では、日曜日と祝日にはゴミ収集が出来ないことになっています。ですから、連休の後には大変なゴミの量になります。

ある年のゴールデンウィーク明け、Tさんから「明日、明後日と大変だから、もし手が空いていたら手伝ってくれないか」と頼まりましたので、私はお手伝いをするにしました。

この年のゴールデンウィークは四連休があり、その間のゴミが連休明けにドバツと出されます。

ごみ収集の仕事は、想像以上にたいへんな仕事でした。朝、六時半に出発して契約業者を回ります。ようやく契約業者のゴミの回収を終えると、今度は一般家庭ゴミの回収に回ります。連休明けのゴミ集積所は、予想通りゴミの山となっていました。

そのゴミを収集車の後部に、持っては投げ入

れ持つては投げ入れの繰り返しで、すべて入れ終わると少し先の集積所に行き、同じ作業の繰り返しです。時間の経った生ゴミは、水を含んで非常に重いんです。体力には自信があったのですが、少し回っただけでヘトヘトになってしまいました。

沢山のゴミが出されていますので、すぐに収集車は一杯になってしまいます。すると、そのゴミを焼却所まで運んで行きます。焼却所は人里はなれた山の中腹にありましたので、往復だけでもかなりの時間がかかります。それを、十回以上繰り返し返したでしょうか……。その道中、Tさんといろいろな話をしました。

そして、Tさんがこの仕事を始めたキツカケをお聞きしました。

「最初は社員募集の広告を見て、給料も良かったので始めたんだ。そして、やっているうちに町を綺麗にしていることにものすごくやりが

いを感じて、しかも、あまり人気のない仕事だろ。これはいいビジネスチャンスだと思つてな。約五年、務めたあとに、仲間を誘って独立しようとしたんだ。

ところが、もうすぐ会社を興そうというときに、仲間から『ごめん、一緒に出来ない』って言われてなあ、『何だよ』と聞いてもちゃんと答えないんだよ。しつこく聞いたらようやく答えたんだ。その答えがショックでなあ……」
実は、Tさんのお仲間のお母さんが、大反対をしていたという事でした。

そのお母さんは、「地元でそんな仕事をするなんて、絶対に許しません。私はあなたをゴミ屋にするために育ててきたのではありません。もし、どうしても、その仕事をするというのなら親子の縁を切るよ」と、すごい剣幕で言われたそうです。そして、そのお仲間は止む無くお断りをしたのだそうです。

「俺はその話を聞いたときには悔しくて悔しくて……、自分はこの町を綺麗にしているんだと誇りをもってやってきたのに、悔しすぎて涙が出てきたよ」

そんな辛い思いをしたのですが、Tさんは、その後独立して、誇りを持って仕事をしていきます。そんなTさんを慕って、若い社員も二人入りました。「いまでもたまに汚い仕事と言われることはあるよ。でも、誰かがやらなければ困るでしょ。俺たちは誇りをもって仕事をしているんだ。人にどう評価されようと、そんなことは気にしないよ。」そう言うTさんの顔は輝いて見えました。

私たちは、無意識に日常を送ってしまいがちですが、本当に多くの人のお陰様で生かさせて頂いております。着ているものにしても、食べているものにしても、すべて自分ひとりでは出来なんでしょう。

お互いがお互い、それぞれの分野で務めて、お互い知らず知らずのうちに助け合いながら生きています。どっちが上でどっちが下ということはありません。お互いが平等に尊いのです。

それなのに、何故人間は必要以上に比べ評価をするのでしょうか……。何故、見た目や職業で判断をするのでしょうか。

自分の価値を高めるということは大切な事だと思います。一生懸命に勉強して、難関と云われている大学に入学し、就職を有利にする。地道に実績を積み重ね、会社のなかで出世をする。その行為も自分の価値を高めるということになります。

私自身も、僧侶としての自分の価値を気にながら生きています。そのことが悪いとは思いません。

しかし、それぞれの価値観をすべての人に当

てはめて判断することがいけないことなのです。

Tさんのお仲間のお母さんは、自分の息子が
ごみ収集の仕事をするに値しないと、自分の価値観を息子に押し付けてしまいました。自分がだしているゴミを集めてくださり、自分の住んでいる街をきれいにしてくれている。世のため人のために働いているTさんの仕事の本質を見ようともせず、偏った眼で、考えで、仕事の価値を決めつけて、Tさんを傷つけてしまいました。

もしそこで、仏の価値観を持った母親であったのなら、違った結果になったであろうし、少なくともTさんを傷つけることはなかったでしょう。

このことは、私たちもよくよく気をつけていかななくてはなりません。

今から、およそ一一〇〇年まえの中国に出ら

れた代表的な禅僧に、徳山宣鑑とくせんかんという方がいらっしゃいます。

この方は、中国北方の出身で、もともと禅僧ではなく学者でありました。特に、『金剛経』を深く研究し、金剛経に關しては誰にも負けなという自負を持っていました。

時を同じくして、南方のほうで禅が盛んになつており、「坐禅によって、自己の本性を徹底し、仏となる」と云つて、大きな勢いで広まっていました。

徳山は、「そんなに簡単に仏になれるものではない。全くけしからん。ここはひとつ、禅にかぶれているものを全部参らせてやろう。」こういう大見栄をきつて南方に出かけて行きました。

やがて、湖南省の地に到つた徳山は、茶店をみつめて「ちょうど疲れてきたところだから、お茶でも飲んで餅をひとつ食べよう」と思つて、

店のなかに入りました。

徳山が背負っていた大きな荷物を下ろし、餅を注文しようとする、その店のお婆さんが重そうな荷物を見て「これは、これは、お坊さま。大きなお荷物をお持ちで。いったいこのなかには何が入っているのですか」と尋ねます。

徳山は、得意になって「これか、これは私の研究しておる『金剛経の注釈本』が入っておるのだ」と答えます。

すると、お婆さんが、

「それでは、その金剛経のなかにある一句について質問しようございます。もしお答えくたされれば、いくらでもお餅を差し上げます。当然、お代は結構です。ご供養させていただきます。しかし、もしお答えくたされなければ、お餅を差し上げることはできません。そのときは、よそで食べてください。」

徳山は、金剛経については何年もかけて、何

度も何度も読み返し、すべてを解釈しているつもりでしたから「なんでも質問しなさい。なんでも答えてやろう。」と得意げに言いました。

「それでは質問致しますが、金剛経のなか『過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得』とありますが、あなたさまが餅を食べたいと思う心は、いったいどの心で食べたいのでありましょうか。」

過去の心は過ぎ去った心であるからつかむことはできない。それなら現在かというと、この世は無常で片時も留まらない。今と言っている今も、すでに過去のものになってしまうから同じようにつかみようがない。当然、未来の心も未だ至っていないわけだからつかみようがない。

非常に鋭い質問です。

頭のなかではすべて解決できると思っていた徳山は、具体的な問題にぶつかってグウの音も出なくなってしまうました。

完全に参ってしまった徳山でしたが、我が強いのか素直に認めることができない。しかし、どう考えても答えようがなく、口を開こうにも聞くことができない。

ようやく口を開いた徳山は、「あなたがこんな質問をするということは、きっとこの近くに大きな知識を持った人がいるのでしよう。あなたに智慧をつけたその人を紹介してくれないか」とお願いをしました。

すると、茶店のお婆さんが「お坊さん、あなたのおっしゃる通りです。ここから約一里ほど行ったところに、龍潭りゅうたんという和尚さまがいらっしゃいます。もしよろしければ、そちらへお出かけください」

そう云われた徳山は、居ても立ってもいられず、すぐに龍潭のところに向かいます。疲れも吹き飛び、もう餅の問題どころではない。いのちを掛けて研究を重ねた金剛経の問いに答えら

れなかった。今度は本當のいのちの問題です。一里ほど歩いて、徳山は龍潭のいるお寺に辿り着きました。

禪マスターである龍潭和尚と会った徳山は、自らのちをかけて研究をした金剛経で勝負しようとしたが、コテンコテンにやられてしまいました。

とにかく、禪宗の坊さんをやり込めようという意気込みでやってきたのでありますが、ミイラ取りがミイラになってしまったわけです。

夜も更け、龍潭和尚が「いったいいつまでここにおるつもりじゃ、夜も遅くなったからそろそろお帰りなさい」といって、徳山に帰るようにおすすめしました。

徳山の方も、いつまでもいては迷惑になると思い、御礼を申して外に出ますと、あたりは真っ暗で何も見えない。

そこで、再び龍潭の処に戻って「申し訳あり



ませんが、あたりが真つ暗で帰ることができません。」というと、龍潭和尚が口ウソクに火をつけて持ってきて徳山に手渡そうとしました。その時、龍潭和尚は口ウソクの火を、フウと吹き消してしまいました。

その瞬間、徳山は大悟徹底、お悟りを開きました。

暗闇のなかで、最も大切な火の明かりを消してしまった。消すぐらいなら、最初から渡さない方がいいというのが理屈ですが、「金剛経こそ価値のあるもので、禅は価値がない」と、偏った価値観をもっていた徳山を目覚めさせる最善の手段だったのです。

そこには、禅僧とか学者とか、光明とか暗闇とか、悟りとか迷いとか、そういった相対的なものの見方を壊してしまった、絶対「空」の価値観。一つのいのちが活き活きと表現されているのです。

『般若心経』のなかの有名な一説に「色即是空・空即是色」という句があります。

我々は別々に存在しています。それが「色」です。私も、皆さんも、この建物も別々です。別々なのだけでも、みんな同じひとつのいのちである。これが「空」です。色即是空です。

その一つのいのちの中で、私たちは別々の存在としてここにいる。これが、転じて「空即是色」ということです。

もう少し、わかりやすく言いますと、この善光寺の入り口にも大きな桜の木がありますね。春になると桜の花が咲き乱れ、私たちが魅了します。

その花の一つ一つは、同じように見えるのだけれども、一つとして同じものはありません。大きさや形も違うし、同じピンク色でも、赤に近いピンクであったり、白に近いピンクであったり、それぞれ個性を出しています。

その花の一つ一つを、私たち人間に例えることが出来ます。それぞれが個性を出して、それぞれの価値を表現しています。

そして、自分の方が形がいいとか悪いとか、相手の方が色がきれいとか汚いとか、大きいとか小さいとか、花だけを見て比べて生きています。

私たちはつい、桜が咲き乱れる時期には、花だけに目がいつてしまいます。しかし、どの花も枝から栄養をもらい、その枝は一つの木から伸びて、やがては目に見えない地中にある根に繋がっています。その根から、生きていくエネルギーをいただきます。花を咲かせることが出来るのです。

花だけが独立して存在することはありません。すべて繋がっているのです。

それが、「色即是空・空即是色」ということです。とても大切なところですよ。

この一本の木のところをしつかりと踏まえて生きていくといかないのでは、大きく違つてきます。

私たちは、自分の置かれている環境のなかで、自分以外の人を意識して生活しています。それはそれが必要なことです。全くないというのも問題です。しかし、必要以上に自分の価値を高めようと意識しすぎて、多くの人はカッコつけたり、失敗しないようにと気を使います。

それと同時に、「自分」を自分の外に意識します。そして、自分自身にも気を使って、価値を高く見せようといひ恰好をしようとしみます。

環境のなかで、現実の自分と理想の自分の間に挟まれて、自分の価値を気にしながら生きることは、精神的エネルギーを消耗させる大きな原因になるのです。そして、自分で自分が分からなくなってしまうです。これは苦痛です。

人の価値は、自分が決めるものでも、他人が決めるものでもありません。「空」、みんな一本の木であり、一つのいのちのなかを、あますことなく、欠くることなく、それぞれに生きていくのです。

その一つのいのちを、しつかりと我がものに出れば、自然と優しくなれます。

姿形が変わるわけではありません。自分の置かれている現状が変わるわけでもありません。だけど、与えられたこの人生を、より豊かに生きたることが出来る。そのことを、仏教では三六〇度の転換といひます。ぐるりと一回りして全く同じ場所に戻るといひことです。何も変わらなくても、精神状態は大きく変わります。どのように生きてても同じ時間がながれます。であれば、心豊かに生きてまいりましょう。そのことが、私たちの大切な亡き方々への、最善の供養になることでしょう。